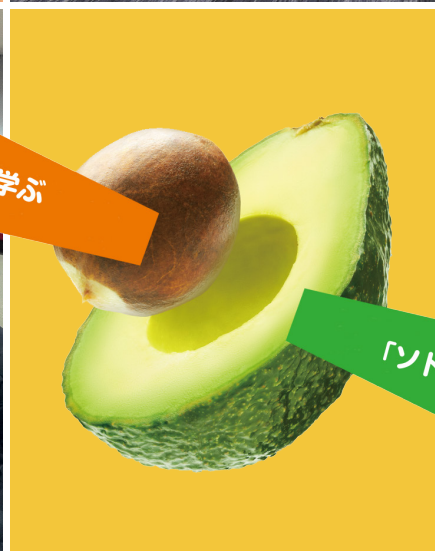


「ごちゃまぜ協働」による ソーシャル・アントレプレナーシップ育成プログラム 成果報告書



はじめに

関西大学地域連携センターは、地域との連携を担う窓口として2005年4月に設置されました。関西大学の学是「学の実化」は、1922年に大学が昇格した際の総理事であり、後に第11代学長を務めた山岡順太郎によって提唱されました。彼は、学問の実質的価値はその社会化にあると述べ、「学問とは現実の事象に即して、実際から出発し一つの原理に到達する順序と、学術的思索から実際に帰る順序とが、表裏一体とならなければならない」と説明しました（『千里山学報』第8号）。この精神は、地域連携活動を通じて、現実世界から学び、獲得した学知を社会に還元する試みとして、本学の学是「学の実化」を体現しています。

現在はVUCA（※）時代と言われるように、社会的課題が山積みし、将来に対する不確かな時代を若者たちは生きていくこととなります。このような時代を乗り越えるため、地域連携センターは機会を求めて「考動」したいと願う学生たちと共に、三菱みらい育成財団の助成を受けて、「ごちゃまぜ協働」によるソーシャル・アントレプレナーシップ育成プログラム（SEJumCoプログラム、通称：アボカド・プログラム）を2023年度から開始しました。

プログラムは、より良い社会を目指し自ら考動できるソーシャル・アントレプレナーシップ（SE）を育成することを目指し、内的世界の深耕と外的世界の深耕という2つの内容で構成されています。その運営は、関西大学を中核に、様々な専門組織との協働のもと、地域と連携して行われます。そして、本プログラムは、参加学生たちが、学部・世代の枠を超えたごちゃまぜ協働による化学反応を楽しみながら、実践的に学んでいくようにデザインされています。

SEの育成は急務であるにも関わらず、大学を中心とした体系的なプログラム（内的・外的世界の双方の深耕）は日本においてはまだまだ根付いていないとは言えず、「ごちゃまぜ協働」を通して「内的世界の深耕」と「外的世界の深耕」を養う本プログラムの社会的意義は極めて大きいものと考えています。ここに2025年度における活動の様子とその教育効果をまとめましたのでご覧いただくと幸いです。

なお、本年度をもちまして、三菱みらい育成財団からの助成は終了致します。同財団からの助成によりまして、本プログラムが大きな成果に繋がりましたこと、同財団関係者のみなさまに心よりの感謝を記したいと存じます。次年度からは、これまでの成果を踏まえて、本プログラムをより発展させて参りたく存じますので、引き続き、みなさまのご理解とご支援をお願い致したく存じます。

※VUCA（ブーカ）とは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）という4つの単語の頭文字をとった言葉で、目まぐるしく変転する予測困難な状況を意味します。

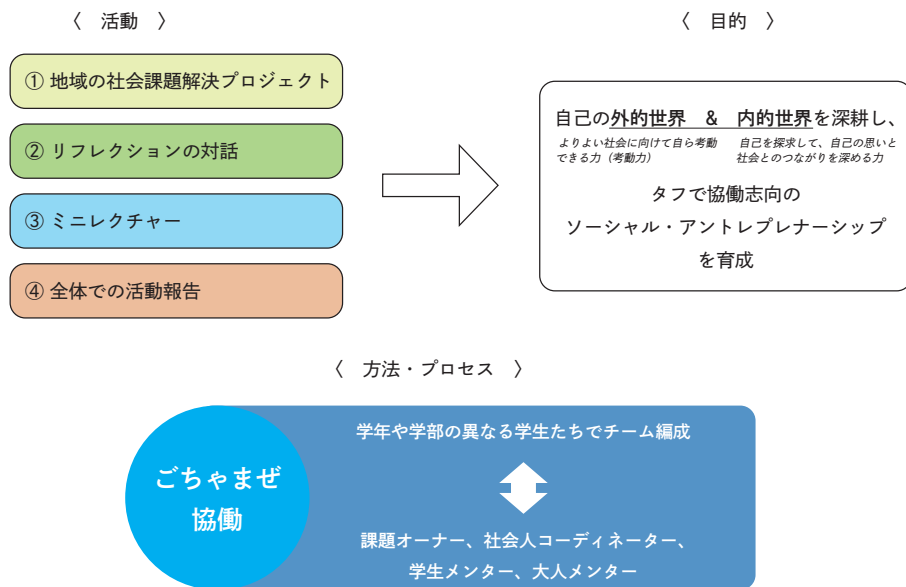
目次

05	アボカドプログラムの概要
08	地域の社会課題解決プロジェクト
09	取り組み課題一覧
10	ローカルでスモールな博物館の展示方法と屋外活用を考える
11	宿場町ライブラリープロジェクト
12	地域交流拠点 CHATTA ベースの運営を考える
13	映画館のない街での映画上映会の実践
14	多様な視点で共生マップを考える
15	合意形成オンラインプラットフォームの活用方法
16	大野の地域メディア制作プロジェクト
17	福井サーモンの持続可能な養殖
18	農と食、都市と地方
19	地域×教育をコミュニティースクールの現場から体感する
20	拠点の紹介
24	効果検証
35	資料：学生募集用チラシ
38	謝辞

アボカド・プログラムの概要

アボカド・プログラムとは？

アボカド・プログラムの目的は、参加学生たちの内的・外的世界の双方を深耕するプログラムを、学部・世代横断型（ごちゃまぜ）で実施することで、タフで協働志向のソーシャル・アントレプレナーシップ（SE）を育成することにある。また本プログラムの学習効果を学術的に観察・測定することで毎年改善を図り、大学を核に地域と連携して創造する 21 世紀型の教育プログラムの構築を企図することにある。



本プログラムの目的を達成するために、具体的には次の 4 つの活動に取り組む。

① 地域の社会課題解決プロジェクト

チーム単位で現地フィールドワーク、住民・自治体職員・地域企業へのインタビューや現地アンケート調査等を行い、社会実装案の企画と実践を行う。

② リフレクションの対話

チーム単位でリフレクションの対話を行い、意欲を高めながら活動継続を目指す。

毎週のリフレクションにより、自己や活動内容を客観視して言語化する力を育み、目標に向かって邁進する意欲を高める。同時に基礎スキルを養うために、課題図書の見直しを行う。

③ ミニレクチャー

現地フィールドワークに行く前に身につけておくべき知識等の習得やチーム内の関係を構築し、チームワークを深めることを目的としたグループワークを含む講義を行う。

④ 全体での活動報告

チーム活動にとどまらず、全体での活動報告（全 2 回）を行い、全体での対話と交流を図ることで、よりよい化学反応がうまれることを目指す。

2025年度からの新たな試み、前年度からの変更点

前年度の実施状況、アンケート結果等から、SEの達成度向上、課題レベルと年次のミスマッチ、学生間および関係者間のチームビルディング、教員の立ち位置や関与の仕方がプログラムの運営上の課題として挙げられた。これらの解消に向けて、2025年度は以下の取り組みを新たに実施した。

① フィールドワーク前のミニレクチャーの実施

フィールドワークに必要な基礎知識の習得に加え、グループワークを通じてチーム内の関係構築を促進することを目的としてミニレクチャーを実施した。事前の学習と交流により、チームワークを深めた状態で現地活動へ移行できる体制を整えた。ミニレクチャーは、(1) 地域課題、社会課題を知ろう (2) 地域で活躍するための巻き込むチカラ (3) アントレプレナーシップ/ソーシャルアントレプレナーシップをつかもう (4) リフレクションをやってみようの4つのテーマで実施した。

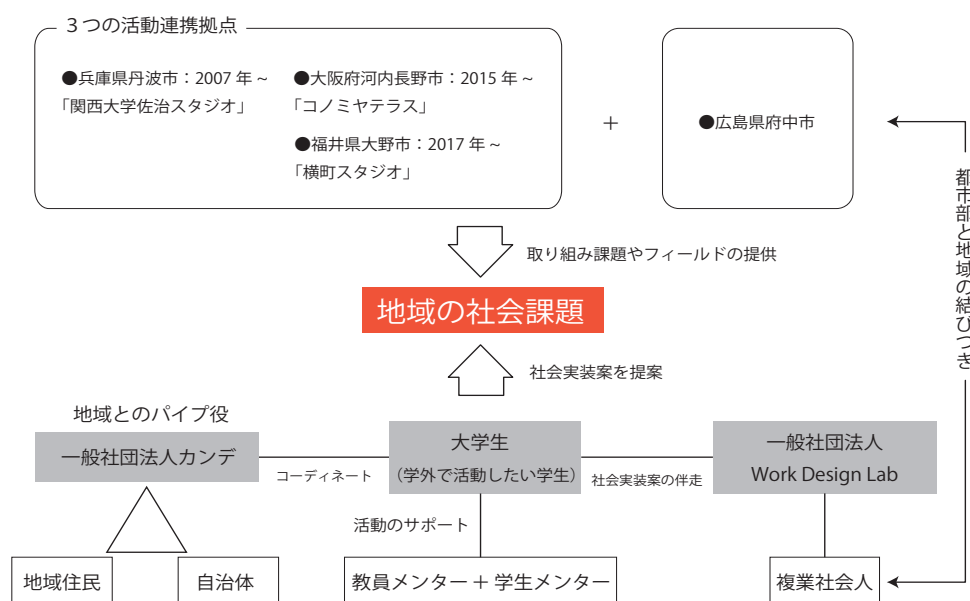
② 学生メンターの位置付けを明確化

前年度までのプログラム参加経験者を「学生メンター」として登用し、その役割を明確化した。学生メンターは、受講生の相談役・励まし役・見守り役としてプログラム運営に携わり、後方支援を担う。具体的な業務としては、全体イベントにおける司会進行等の運営、Instagramによる広報活動、ランチミーティング（情報共有・交流）の開催、現地フィールドワークへの同行などを行った。

③ 教員メンターを地域ごとに配置

今年度より、教員メンターの配置を昨年度の「1課題につき1名」から「1地域につき1名」へと変更した。メンターの役割は、あくまで「ごちゃまぜ」の場をコーディネートすることに特化し、学生の主体性を尊重するため、プロジェクトの事業内容そのものへの介入は行わない。これにより、地域単位での横断的な連携と、学生自らが考え行動する力の育成強化を図る。

以上を踏まえ、学生は、関西大学が連携する3つの活動拠点に広島県府中市を加えた4地域で地域の課題解決に取り組んだ。



実施スケジュール

キックオフ・イベント	： 6月1日（日）
ミニレクチャー	： 6月4日・11日・18日、7月2日（いずれも水曜日）
中間発表会	： 9月28日（日）
最終成果発表会	： 12月21日（日）
リフレクション	： 6月1日（日）～12月21日（日）
現地でのフィールドワーク	： 6月1日（日）～12月21日（日）

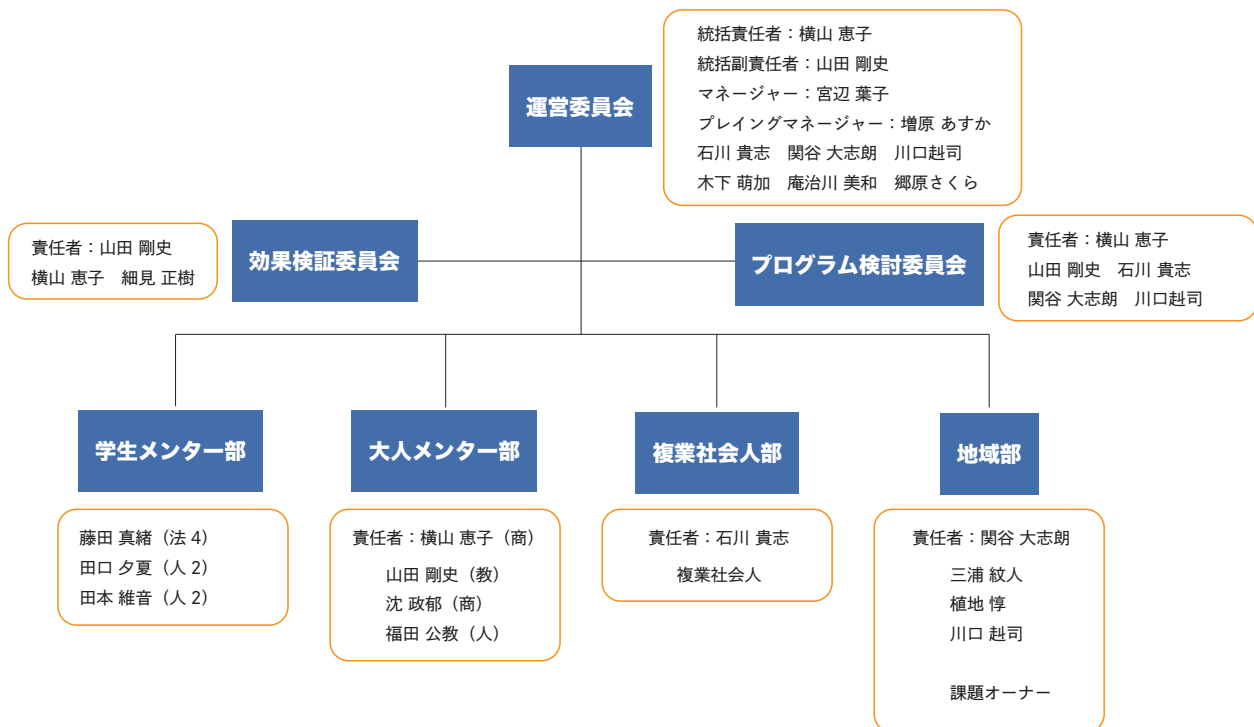


ミニレクチャーの様子



最終報告会の様子

実施体制



地域の社会課題解決プロジェクト

一般社団法人 Work Design Lab、一般社団法人カンデ

本学と連携している3拠点に広島県府中市を加えた各地域で課題を解決するフィールドワーク型プログラム。参加学生たちが、各学部世代横断型でグループを組成し、地域の社会課題を、複業社会人(※)や企業・自治体等と協働しながら解決していくプロジェクトであり、SEとして外的世界(自己と外の社会とのつながり)を耕す力を育むプロジェクトです。

※「複業社会人」とは、1つの仕事だけでなく、いくつかの仕事を掛け持ちしながら働く人を指し、「パラレルワーカー」とも言われる。

取り組み課題一覧

- ① ローカルでスモールな博物館の展示方法と屋外活用を考える
課題オーナー：青垣いきものふれあいの里 友の会
- ② 宿場町ライブラリープロジェクト
課題オーナー：NPO 法人佐治倶楽部
- ③ 地域交流拠点 CHATTA ベースの運営を考える
課題オーナー：NPO 法人佐治倶楽部
- ④ 映画館のない街での映画上映会の実践
課題オーナー：コノミヤテラス運営研究会
- ⑤ 多様な視点で共生マップを考える
課題オーナー：河内長野市商店連合会
- ⑥ 合意形成オンラインプラットフォームの活用方法
課題オーナー：河内長野市役所まちづくり推進課
- ⑦ 大野の地域メディア制作プロジェクト
課題オーナー：大野の印刷・編集室みなと 山本 響 氏
- ⑧ 福井サーモンの持続可能な養殖
課題オーナー：(株)sa-mo 村上 雄哉 氏
- ⑨ 農と食、都市と地方
課題オーナー：純ちゃん農園 牧野 純也 氏
- ⑩ 地域×教育をコミュニティースクールの現場から体感する
課題オーナー：府中ノアンテナ 小谷 直正 氏

① ローカルでスモールな博物館の展示方法と屋外活用を考える

チーム名：デコとポコ

木寺 はるか 檜垣 百花 吉村 明莉

大学生目線 # アナログ共創 # リニューアル



地域課題



来館者数が伸び悩み、特に若者層や丹波市内外への認知・アプローチが不足している。また、施設の魅力を十分に活かしきれず、展示や企画のマンネリ化、来館者目線に立ったリニューアル案の不足が課題である。

解決案



現地交流を通して若者目線から施設の現状を分析し、オーナーさんとチームでのミーティングを重ねることで、地域・ふれあいの里に寄り添ったリニューアル案を考案・提案する。



チャレンジ!



夏にワークショップを開催。それをもとにリニューアル案を提案。その後、Instagramのリール作成やイベント名考案など、具体的な内容に踏み込んで活動した。また、週一回のミーティングを継続的に行った。



活動スケジュール

- ・ 8/1~3 展示施設視察、むしとりペナントレース参加
- ・ 8/26~28 あおがいきものワークショップ開催
- ・ 10/28、12/6 課題オーナーへリニューアル案の提案

課題オーナー：青垣いきものふれあいの里 友の会
協力：丹波市役所

メンター：人間健康学部 福田 公教
コーディネーター：一般社団法人カンデ 植地 暁

② 宿場町ライブラリープロジェクト

チーム名：HAYTK

高尾 歩奏 中西 心音 増井 優 小島 隆樹 林 葵

#本 #現地アンケート #空き家活用



地域課題



本屋がない青垣町の本町の家で行われているライブラリープロジェクト。ライブラリープロジェクトの本棚オーナーとなる方が少なく経営が厳しいだけでなく、町の方にもあまり認知されていない。

チャレンジ！



先行事例・現地の方へのヒアリング、ライブラリープロジェクトの認知度を上げるためのサジイチへの出店＆イベントを開催。



解決案



本町の家・ライブラリープロジェクトの認知度の向上や気軽に寄ることができる場を作るために、通りから見える看板や明るい照明の設置、町の方々との季節行事イベントの実施、屋内に町の方々と作った季節飾りの設置を行う。



活動スケジュール

- ・8/22～24 本棚オーナー＆住民へのヒアリング
- ・9/11～13 「本棚の主になろう」の開催
- ・10/25～26 サジイチへの出店
- ・12/1、12/7 まちごこち文庫、不真面目商店へのヒアリング

課題オーナー：NPO 法人佐治倶楽部

協力：mamimumemobookbook、まねき堂はしもと

メンター：人間健康学部 福田 公教

コーディネーター：一般社団法人カンデ 植地 惇

③ 地域交流拠点 CHATTA ベースの運営を考える

チーム名：N. _ .ICE

岡野 菜津子 木村 陽翔 齊藤 遥 長松 もも 山口 花菜

地域交流 # 空き家活動



地域課題



私たちは商店街の中にある空き家を改修した CHATTABASE の運用を考えると、課題のもと、活動を行った。地域の方々の話し合いや、アンケート調査を実施し、課題解決に向けて活動に尽力した。

解決案



貸し出しスペースと憩いの場としての活用。貸し出し希望者がイベント等の開催を通じて、街の活性化につなげることを目的とする。地元住民が気軽に集い、交流できる機会をサポートする場所としての役割も担う。



チャレンジ!



CHATTABASE に関するアンケートの作成、地域住民約 140 名に聞き込み調査を行い、そのアンケート結果を基に CHATTABASE でワークショップ、コミュニティカフェを実施した。

活動スケジュール

- ・ 8/3~5 地域住民へのヒアリング、改修のお手伝い
- ・ 8/23~25 地域のお祭りに参加、提案内容の検討
- ・ 10/26 ワークショップ、コミュニティカフェの実施



関西大学ソーシャルアントレナーシップ事業
ものづくりワークショップ
 大学生が教えます！みんなで1つの作品を作ろう！
10月26日(日)
 13:00~16:00 途中参加・退出可能
 場所 CHATTABASE 丹波市氷上町成校333
 参加費 無料
 持ち物 なし
 服装 汚れてもいい服
 内容 ダンボールや野菜の断面を使ったスタンプ作り
 対象 誰でもOK！大人も子どもも大歓迎です！
 ※当日参加も可能！
 申し込みはコチラ
 申し込み期間 10/24(金)~10/26(日)
 申し込み先 13:00~16:00 申込不要
 コーヒー1杯(100円)

課題オーナー：NPO 法人佐治倶楽部

メンター：人間健康学部 福田 公教
 コーディネーター：一般社団法人カンデ 植地 惇

④ 映画館のない街での映画上映会の実践

チーム名：Laughter

赤坂 珠莉 久保田 秀斗 佐藤 正人

映画研究部 # コノミヤテラス # 関大生ならではの



地域課題

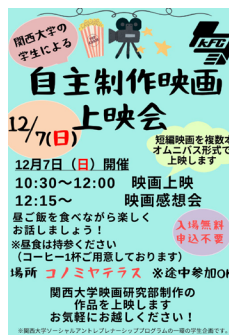


映画上映会を継続的に実施していくためには、映画のレンタル料や会場費などの経費をまかなう仕組みと、継続的に運営を担う人の確保が必要であるが、現状では一時的な関わりに依存しており、継続性に課題があった。

解決案



映画上映会を継続するための解決案として、文化発信の場を求める人や団体を探し、その方々にイベントの開催場所として地域に来てもらうことで、運営面の課題を解消することを考えた。



チャレンジ!



自主制作映画の発表の場を求める関大映画研究部と地域をつなぐことで、上映作品の確保にかかる経費を抑えるとともに、運営に関わる人員の確保にもつなげることができた。

活動スケジュール

- ・ 9/26 南花台夏祭りに参加、かき氷販売
- ・ 11/6 コーディネーターとオンラインミーティング
- ・ 11/20 打ち合わせ+フィールドワーク
- ・ 12/7 映画上映会の実施

課題オーナー：コノミヤテラス運営研究会
協力：関西大学映画研究部

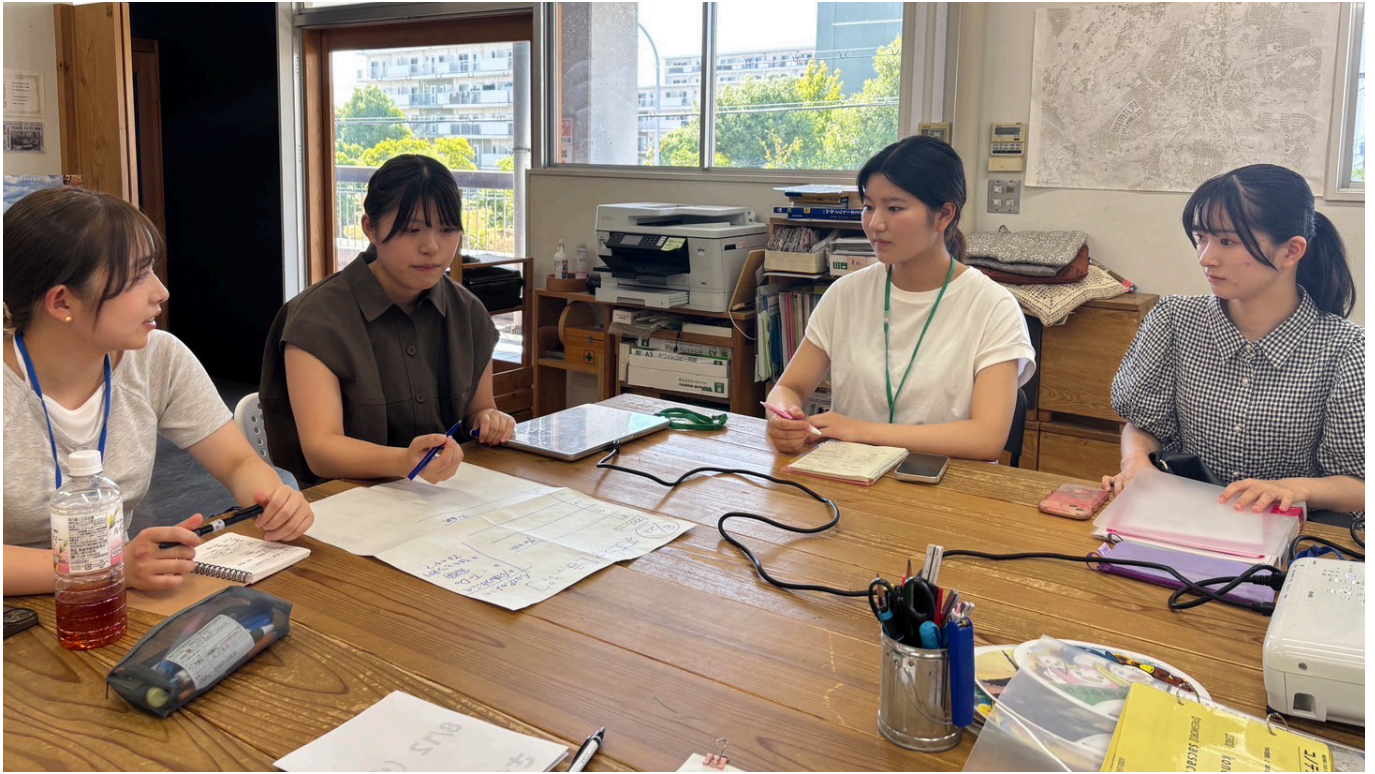
メンター：商学部 横山 恵子
コーディネーター：一般社団法人カンデ 関谷 大志朗

⑤ 多様な視点で共生マップを考える

チーム名：まっぷ

島影 遥 後藤 芽依 増川 菜花 田代 紗菜 川村 乃愛

共生マップ # 学生目線 # 河内長野市



地域課題



高齢化が進む河内長野市において、住民がより生活しやすくなる共生マップを課題オーナーと制作するうえで、対象者を絞らないマップとは別軸の学生ならではの視点を取り入れた河内長野市の共生マップを制作すること。

解決案



世代間のギャップに注目して「Instagramで巡る河内長野市」をテーマInstagramを活用している店舗に限定してマップを作ることで学生独自のマップを作るに至った。



チャレンジ!



Instagramの投稿をもとに市内のカフェ・アパレル計12店舗を選定し、実際に現地を訪問して趣旨説明と共生マップへの掲載許可を得る取り組みを行った。



活動スケジュール

- ・7月 共生マップとは何か調べる
- ・7月～12月 課題オーナーや協力者とzoom会議(月1回計6回)
- ・10月 学生独自のマップづくりの話し合い(テーマ決め)
- ・11月～12月 各自で調べたお店に訪問(計12店舗)

課題オーナー：河内長野市商店連合会
協力：地元飲食店事業者(12店舗)

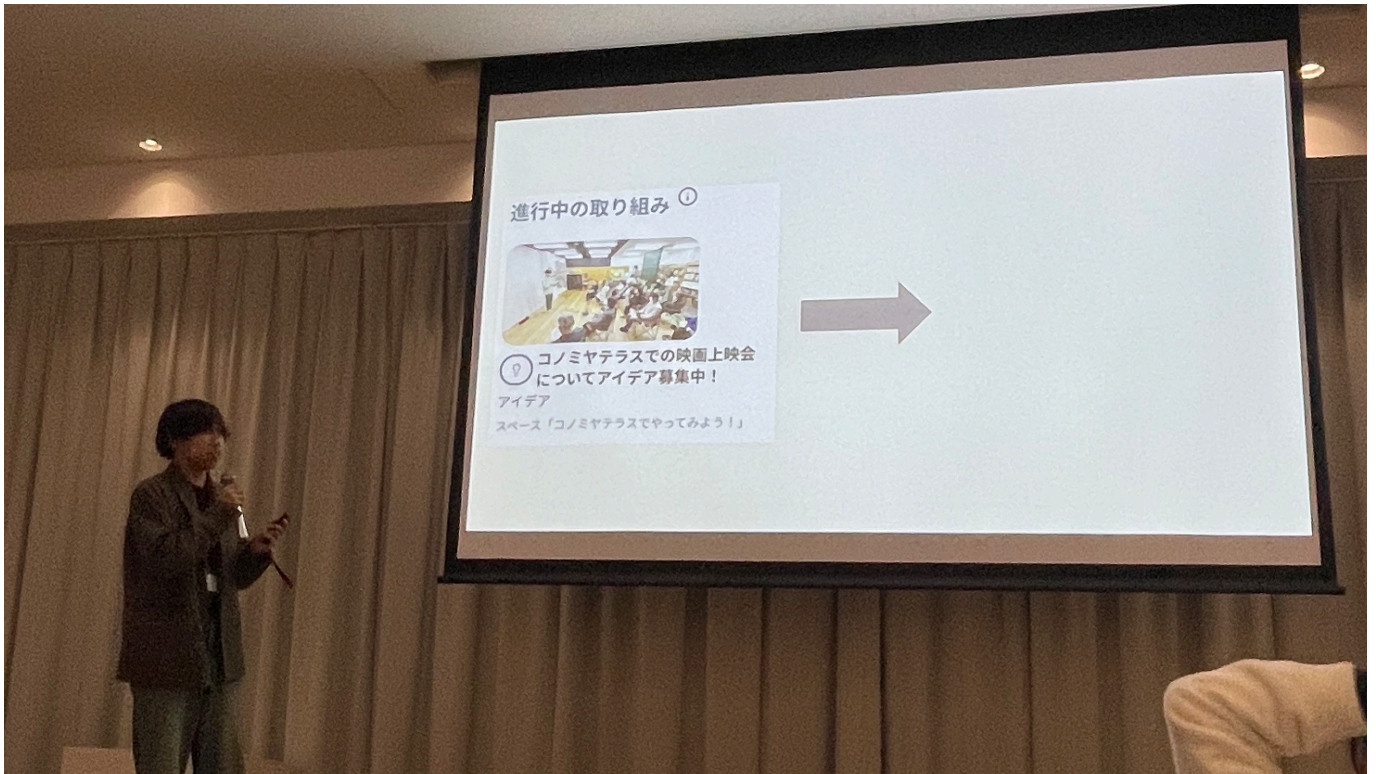
メンター：商学部 横山 恵子
コーディネーター：一般社団法人カンデ 関谷 大志朗

⑥ 合意形成オンラインプラットフォームの活用方法

チーム名：リクリッド

柏木 陽貴 清水 晴

#リクリッド #オンライン #写真



地域課題



高齢者が多い町、河内長野市南花台はベッドタウンであるが故に地域内での娯楽が少なく、市役所の課題としては人口減少と高齢化が進む町の市民に自分の市に興味を持ちかつ行政に興味を持って欲しい。

解決案



リクリッドを通じてフォトコンテストを開催! 地域内の娯楽になるほか、市民が自分達の町や行政、イベント等について話しあえるアプリ「リクリッド」の認知を深めてもらい、行政への興味につなぐ。



チャレンジ!



公民館、市の公式 LINE、スーパー、カフェ、道の駅に広報を行い 11 件の作品の投稿があり、スーパーコノミヤでのフォトコンテストを開催。140 件ほどの投票の末、1 位を決定し、地域広報紙の表紙として掲載された。



活動スケジュール

- ・6~8月 文献、フィールドワーク等で自治体について調査
- ・9月 地域住民を対象にアンケート調査と企画思案
- ・10月~11月 リクリッド内のスペース作成と広報
- ・12月 フォトコンテスト開催

課題オーナー：河内長野市役所まちづくり推進課
 協力：コノミヤテラス スーパーコノミヤ南花台店
 株式会社 Liquidous

メンター：商学部 横山 恵子
 コーディネーター：一般社団法人カンデ 関谷 大志朗

⑦ 大野の地域メディア制作プロジェクト

チーム名：楽市

井上 侑大 木下 美涼 高橋 理奈 中村 航平 山本 龍之介 湯川 洸生

双方型交流 # 得意を活かす # 関大生らしさ



地域課題



まちの魅力を十分に伝えることができていない。また、空き家の増加などが目立ち、より盛り上がりが必要な状況であること。

解決案



七間楽市での出店を通して関西大学と双方型交流を行った。それぞれの学生が得意分野で活躍できるように、ドリンクチームと写真集チームに分け役割分担を行った。



チャレンジ!



関西大学万博部の協力を得て実現したクラフトコーラの販売と、メンバーそれぞれの地元である関西地方と大野市の街並みを比較した写真集の販売を行った。



活動スケジュール

- ・ 10/11~12 出店に関する打ち合わせ
- ・ 11/9 「七間楽市」での出店当日
- ・ 12/14 「まち FUN まつり in 関西大学」での写真集の販売
- ・ 12/20 地元のイベントで交流を拡大

課題オーナー：大野の印刷・編集室みなと 山本 響 氏
協力：横町編集部

メンター：商学部 沈 政郁
コーディネーター：一般社団法人カンデ 三浦 紋人

⑧ 福井サーモンの持続可能な養殖

チーム名：サーモン

内林 大哉 三本木 政宏 東條 佳輝 長谷部 一紀

世界初の挑戦 # 長期熟成 # 協力



地域課題



地域資源である福井の養殖サーモンの認知度が低く、魅力の発信不足により、市場への浸透や消費拡大が十分に進んでいない。

解決案



1. 生ハムサーモンを伝えるための資料（チラシ）を作成する。2. 個人経営の店舗へ営業を行う。3. Instagram による宣伝を行う。4. 私たち自身が料理した一品を投稿し、その魅力を伝える。5. 学園祭とは異なるイベントに出店する。（などの様々な案が出た。）

チャレンジ！



現地の方と協力しながら、Instagram 投稿内容を考え、動画撮影に協力した。また、神戸市兵庫区梅本町で開催された「オープンバイソン」というイベントで生ハムサーモンを試食として提供した。



活動スケジュール

- ・ 8/4~8/7 サーモン収穫 & 熟成実習、SNS 投稿内容の相談・提案
- ・ 9/3~9/5 SNS 投稿用の動画撮影
- ・ 11/22 イベント出店

課題オーナー：(株)sa-mo 村上 雄哉 氏

メンター：商学部 沈 政郁

コーディネーター：一般社団法人カンデ 三浦 紋人

⑨ 農と食、都市と地方

チーム名：チーム純ちゃん

恩地 虎太郎 小阪 正也

ネギの袋詰め機械 # 作業の効率化 # 付加価値



地域課題



ネギ出荷作業は時間がかかり、少人数ゆえの負担も大きい。負担軽減のための機械導入を検討したが、高額な費用が障壁となっていた。

解決案

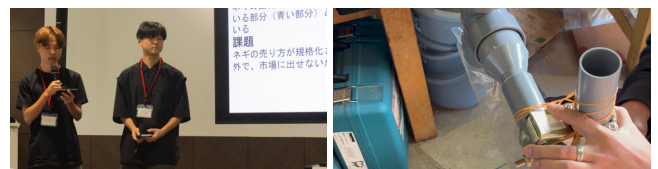


出荷作業の時間を縮めることのできる機械を自作し、効率化を図ることで課題オーナーの負担を軽減する。

チャレンジ!



作業効率化と人手不足解消のため、ホームセンターの材料でネギ袋詰め機を自作した。高価な市販品の代わりに低コストで製作し、オーナーの経済的負担軽減を図った。



活動スケジュール

- ・ 8/9~11 課題オーナーヒアリング、ネギの出荷作業の体験
- ・ 11/1~11/3 ネギの袋詰め機械の作成
- ・ 11/2 野菜ソムリエの方の話を伺う

課題オーナー：純ちゃん農園 牧野 純也 氏
協力：横町編集部

メンター：商学部 沈 政郁
コーディネーター：一般社団法人カンデ 三浦 紋人

⑩ 地域×教育をコミュニティースクールの現場から体感する

チーム名：府中焼き

勇 琴羽 上原 鈴音 加賀山 耀 川村 なな子 福田 羽菜

模擬会社 # 教育×地域



地域課題



明郷学園の生徒と企業支援チーム以外の地元企業の接点不足および模擬会社活動終了後、地元の高校や大学との継続した関わりがない。

チャレンジ！



地元企業に関する紙パンフレットとWebカタログ作成・提案、模擬会社に関するアンケートの作成・実施提案、地元の高校や大学との連携提案

解決案



明郷学園の生徒に地元企業をより知ってもらう機会の創出と地域内連携の強化による継続性の確保。



活動スケジュール

- ・7/31 小谷氏、石川氏、山田先生とオンライン会議
- ・8/21~8/23 フィールドワーク
- ・10/21 提案書提出

課題オーナー：府中ノアンテナ 小谷 直正 氏
協力：府中明郷学園

メンター：教育推進部 山田 剛史
コーディネーター：一般社団法人 Work Design Lab 石川 貴志

拠点の紹介

一般社団法人 カンデ

本学と連携している4つの地域拠点の紹介。関西大学や自治体、地域住民と連携し、本プログラムを行った兵庫県丹波市、大阪府河内長野市、福井県大野市に加えて京都府八幡市の4つの地域で「大学連携による地域再編まちづくり活動」を実施している。各地域には地域再編や団地再編に取り組む「現地コーディネーター（関大卒業生）」がいる。

関西大学
佐治スタジオ



拠点名 | 関西大学佐治スタジオ

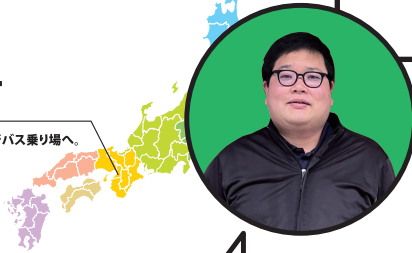
事務局：関西大学佐治スタジオ
〒669-3811兵庫県丹波市青垣町佐治683
✉ saji.club@gmail.com



関大と地域連携の先駆けとなった佐治スタジオは、「関わり続ける定住のカタチ」をコンセプトに、2007年の連携協定締結以降、継続的に開かれています。拠点を運営するのは、関大OB・OGはもちろん、佐治スタジオスタッフと住民からなるNPO法人佐治倶楽部。その事務局長で、自身も一生涯から丹波市に関わりはじめた植地さんに、佐治スタジオの魅力を教えていただきました。

兵庫県丹波市

阪急関大前駅から梅田経由で、三番街バス乗り場へ、全但バス湯村温泉行きに乗り換えて、青垣IC下車徒歩から15分。



植地 惇
Makoto Ueji

1990年生まれ。三重県出身。1回生のときに「ワークキャンプ(丹波)」への参加で初めて丹波を訪れ、その後も「ATACOM」参加や長期休暇に1人丹波を訪れるなどして、拠点の活動に深く関わるように。修士論文も佐治を題材に執筆した。大学院卒業を機に佐治へ移住。趣味は料理で、サジイチなどでは得意のスライスカレーを振る舞う。

長年培ってきた“関わり続ける定住”のネットワーク。
長く関わることで広がる卒業後の選択肢



過疎地域に指定される
中山間地域にある旧宿場町の街道

佐治スタジオがあるのは、兵庫県の中東部、青垣町(現丹波市)の中心部。諸説ありますが、昔は宿場町で、大阪や京都から、豊岡や鳥取などの日本海側に抜ける道として非常に栄えていたそうです。妻入りの町屋や、通りに面して間口の広い建物など、その街並みからは栄華の名残を感じられます。現在は農業や林業が盛んで、特に佐治には職人さんが多く住まれています。DIYをするときは必ず地元の製材所で木材を購入するので、職人さんと交流する機会もあります。生産者との距離の近さは、地域ならではの体験です。



Point 1. 2007年から「関わり続ける定住」を目指し
地域拠点で単位が取れるよ!

佐治倶楽部では、「ワークキャンプ(丹波)」と「ATACOM」などの、丹波を舞台とした大学連携事業の運営を行っています。コンセプトは「関わり続ける定住のカタチ」。丹波に関わった学生が卒業後も、物理的にも心理的にも丹波に関わり続けられる関係づくりを目指しています。ワークキャンプは授業なので、もちろん単位ももらえますよ。設立から2022年で15周年を迎え、今まで拠点に関わった学生はおそらく累計1000人以上。学部1回生から関われるので、OBOGとの交流などから大学卒業後の道が切り開かれることもあるかもしれません。実際、僕は授業参加をきっかけに学部1回生から丹波に関わり始め、こうして卒業後も関わっています。



Point 2. 佐治・青垣らしい景観を大切にしたい。
空き家活用で、佐治の暮らしを豊かに

佐治倶楽部のもう一つの活動軸が空き家活用です。佐治スタジオの他に、「衣川會館」「本町の家」「センバヤ」そして、佐治青垣暮らしの体験宿泊施設の「竹岡部」など、佐治倶楽部で改修した5つの空き家を用途別に運営しています。これらのスペースは、チャレンジショップとして利用してもらったり、高校生のまちづくり活動の拠点になったり、OBOG

や地域の方がお酒を交えながら交流する場所になったりと、佐治の景観づくりと暮らしを豊かにするお手伝いをしています。他にもさまざまなプロジェクトがあるので、興味のあるところからまずは関わってもらえたらと思います。



GO! 関西大学佐治スタジオへ行きたい!

キーワードは、農業、林業、地域再生やまちづくり。

これらに興味がある学生さん、まずは以下のプロジェクトから、丹波に関わってみませんか?

SAJI PROJECT

滞在交流型ワークキャンプ

丹波市内の事業所で就業体験をする単位認定授業。僕の場合、農家での就業体験の場合、合鴨農法や稲刈りを体験しました。学部1回生から参加可能。

ATACOM

隣町で開催される豊宮祭りに向け、造り物という巨大奉納物(インスタレーション)を作るプロジェクト。途中、合宿もあり、和気あいあいのものづくりを楽しめる。学部1回生から参加可能。

コノミヤテラス



大阪府河内長野市

阪急間大前駅から天下茶屋経由で南海三日市町駅へ。
南海バスに乗り換えて
南花台3丁目北徒歩から1分。



拠点名 | コノミヤテラス

事務局: コノミヤテラス運営研究会
〒586-0077 大阪府河内長野市南花台3丁目6-10 2F
✉ konomiya.terrace@gmail.com



大阪府河内長野市南花台地区にあるコノミヤテラスは、産官学民まちづくり事業によって生まれたコミュニティ拠点です。2015年のオープン以降、毎日のラジオ体操や生活支援の有償ボランティアチームの運営、子育て支援スペースの整備や運営などなど、さまざまな活動を産官学民「協働」で行っています。そんなコノミヤテラスで地域コーディネーターを務める関谷大志朗さんに、拠点について教えていただきました。

関谷 大志朗 Taishiro Sekiya

1990年生まれ。熊本県天草市出身。学部生の頃から丹波市の地域再生に取り組み、2015年、関西大学大学院工学研究科建築学分野修士課程を修了(建築環境デザイン研究室)すると、南花台の地域コーディネーターに就任。中学時代はドラム、高校時代は吹奏楽部でコントラバスを担当するなど、音楽にも明るい。最近の趣味はPodcast配信。

多世代交流を通して学ぶ「協働」の作法。 心と力を合わせて完遂する大きなプロジェクト



官民産学が手を取り進む 先進的まちづくり

小高い丘を切り拓いてつくられた南花台は、空がとて広く感じたり、地区の境界線がとてはっきりしていたりという立地的特徴があります。まちびらきから40年が経ち、高齢化率は40%を超える一方で住民の意識がとて高く、行政や企業と連携して先進的な取り組みを多数展開中です。例えば、移動支援を目的に始まったグリーンスローモビリティ「クルクル」には、現在総勢100名程度の住民有志が運行に関わっています。コノミヤテラスがあるのは、南花台の中心部にあるスーパーマーケット「コノミヤ」の2階。買い物ついでに寄ってくれる人がたくさんいます。

Field

Point 1. ハイテクとアナログのバランス感 多世代交流の意識で地道に積み上げてきた役割

コノミヤテラスが関わるプロジェクトは、規模が大きく関係者もさまざま。だからこそ、全員と心と力を合わせる「協働」が大切です。誰かを取りこぼさないよう心がけたところ、多世代交流という軸が生まれました。生活動線上という立地も相まって、今では住民のハブ的な役割を担っています。毎朝10時に行うラジオ体操には、そんな拠点の特長がよく現れますよ。ラジオ体操に参加した高齢者は子どもたちを可愛がり、子どもたちも、子どもの親もそれを見て嬉しそう。コノミヤテラスは、ハイテクな側面を持つまちですが、アナログな人と人との繋がりも大切にしているんですよ。



Point 2. プロジェクトの枠組みの中で考えるプロセス まずは協力を得られる関係性づくりを

多世代交流という前提と、各プロジェクトにおいてコノミヤテラスに与えられた課題とゴールは決まっていますが、プロセスまで決まっているわけではありません。「まずはやってみよう」のスタンスを大切に、枠組みの中でPDCAを回し、課題解決へと近づいていきます。ただ、何かをする際にはさまざまなカタチで地域の方の協力を得なければなりません。南花台では、活動を手伝ってくれそうな方はたくさんいますが、本当に手伝っ

てくれるかは築いてきた関係性次第。だから、拠点に関わる学生には、まずは協力を得られる関係性づくりに取り組んでもらいたいです。大学内ではなかなかできない経験ですが、きっと社会に出たときに役立つはずです。幸い、南花台はそれを体験しやすいまちだと思います。



GO! コノミヤテラスへ行きたい!

[UR 南花台DIYプロジェクト] に参加しませんか?

URの空き住戸に若い世代を呼び込むことを目的に、設計から施工のDIYまでを実施するプロジェクトで広く学生を募集します。設計こそ建築学科の学生がメインになりますが、DIYは学部学年関係なく誰でも参加OK。最初の動機は「ものづくりへの興味」だったとしても、実際に関わってもらえば、きっとものづくり以外のコノミヤテラスの活動の幅広さや面白さを感じてもらえるはず。プロジェクトの過程で地域の方と交流する機会もあるので、人との交流が好きな方ならより楽しめると思いますよ。参加希望者は上記連絡先(メール)でご連絡ください。



拠点名 | 関西大学横町スタジオ

事務局：横町編集部 〒912-0051 福井県大野市日吉町1-7
✉ yokomachi.hensyubu@gmail.com



YOKOMACHISTUDIO
横町編集部 Instagram

福井県の北部にある大野市の中心部、「横町スタジオ」は、2017年設立の最も新しい地域拠点です。「ソフトとハードが連動する仕組みづくり」を目標に、毎朝のラジオ体操やソーシャルコンボの運営、9つのサークル活動を通して、ヒト・モノ・コトを繋げています。横町スタジオが大切にしているスタイルとは？ 拠点運営を担う「横町編集部」の代表、三浦紋人さんに教えていただきました。

福井県大野市

阪急大前駅から大阪駅経由で福井駅へ。
福井駅からJR九頭竜線もしくは京福バスに乗り換えて
越前大野駅から徒歩8分。



三浦紋人
Mond Miura

1994年生まれ。福岡県出身。横町スタジオには立ち上げから関わる。大学院修了後はチリの建築事務所就職予定だったが、コロナ禍で渡航できなくなり、横町編集部の代表と、大野市地域おこし協力隊を兼務することに。現在はソーシャルコンボの研究に力を入れている。趣味は散歩。

“練習試合”ができる地域拠点。
社会に価値を生み出す難しさややりがいを実感してみない？



豪雪地帯の南国!? 水の豊かな城下町の外れにある通り

福井県の北部に位置する大野市は、日本でもっとも南^{*1}にある特別豪雪地帯に指定されるまちです。特徴的な地形が豊富な水資源をもたらしたため、醤油や酒蔵がたくさんあります。「横町スタジオ」は、越前大野城のお膝元、碁盤の目状に整備された城下町の一番外側にあります。住所は日吉町ですが、ここに住む方は目の前を通る「横町通り」という通りの名称に誇りを持っていることから、「横町スタジオ」と名付けました。かつては商店街として賑わっていたそうで、間口の広い建物が連なる昔ながらの商店街の雰囲気があります。

*1: 全国の特別豪雪地帯のうち、市町村単位で指定される地域の中で最南端。



Point 1. 学生もOK、地域住民もOK 誰でも拠点運営に関われる柔軟な仕組み

2019年に「横町編集部」という任意団体を立ち上げたことで、柔軟な活動ができるようになりました。「ワークショップ部」や「持ち寄り部」のような学生主体のプロジェクトはもちろん、大野で会社を経営する社長に取材をし、地元の産業について研究をする「Top Interview」においては、地元の編集者が主体となっているプロジェクトです。横町編集部の仕事や研究をどんどん個人に分配できる仕組みなので、大野まではるばるやってきた学生たちにも対価を払って仕事をお願いしています。この仕組みのおかげで僕は、大野市地域おこし協力隊の仕事や個人事業をしながら横町スタジオでの研究活動も続けられています。



あるそうです。自主性に任せる一方で、経費が予想する成果に見合っているかどうか、プロジェクトの精度はシビアにチェックしています。人のお金を使って社会が期待する成果を出すことを若いうちに学んでほしい。事業費が足りなくても、持ち出しは禁止。自分で補助金を申請したり、売上を作ったりと、ヒト・モノ・カネの使い方を自分で工夫する感覚を養ってもらっています。大学の授業では経験できないことなので、社会に出てからもきつと役に立つ経験になると思いますよ。



Point 2. 容赦なし!! 企画作りは社会の練習試合

学生には社会に価値を生み出す経験をしてもらいたいです。だからボランティアで仕事をさせませんし、学生からアイデアが出てきたときは、最初から最後まで自分で企画を組み立ててもらいます。今大野に来ている学生は、「大野は練習試合に来ている感覚です」と言っていました。自分の得意不得意が浮き彫りになるのは苦しいけれどやりがい

GO! 関西大学横町スタジオへ行きたい!

まずは“やりたいこと”を教えてください!

横町スタジオでは少数精鋭で小回りが効くプロジェクトを複数実施中です。興味を持っていただいた方は、「大野に関わりたい理由」や、「自分のやりたいこと」など、テーマも形式(ポートフォリオや企画書なんでもOK!)も自由で構いません。いただいた内容をもとに一度お話しをしましょう!

2025年度 アボカド・プログラム 効果検証

効果検証ワーキンググループ

商学部 教授 横山 恵子
教育推進部 教授 山田 剛史

協力者

教育推進部 特別任用准教授 溝口 侑

プログラムの開始時（Time1:T1）と終了後（Time2:T2）に実施したアンケート調査結果の一部の概略について紹介。

効果検証実施の概要

SEJumCo プログラム（通称：アボカド・プログラム）では、効果検証ワーキンググループ（WG）を設置し、プログラムの開始時（Time1:T1）と終了後（Time2:T2）にアンケート調査を実施している。ここでは、その結果の一部について紹介する。

第1回調査（T1）は、プログラム開始時（対面でのキックオフイベント）である2025年6月1日（日）の前に、SNS ツール上で依頼・実施した。

46名の受講生中42名から回答を得た（回収率91.3%）。第2回調査（T2）は、プログラム終了時（対面での最終成果報告会）の2025年12月21日（日）の後に、SNS ツール上で依頼・実施した。途中で受講を取り止めた6名を除く、40名の受講生中30名から回答を得た（回収率75.0%）。T1、T2ともに回答している学生は28名であった。

対象者の内訳について、学年および所属学部は図1、2の通りである。学年（図1）で見ると、1年生が最も多かった（52.5%）。昨年度に続き、低年次学生への周知や参加に一定成功していると同時に、低年次からこうした取組への意識が高まっていることが伺える。学部（図2）で見ると、全14学部中11の学部から学生が受講しており、理工系を含め分野を超えて一定のニーズがあることが伺える。過去3年間で最も多様な学部からの参加があった。法学部が最も多く（35.0%）、次いで、人間健康学部（12.5%）となっており、千里山とは異なるキャンパスからの学生参加も多く見られた。

図1 対象者の内訳（学年）

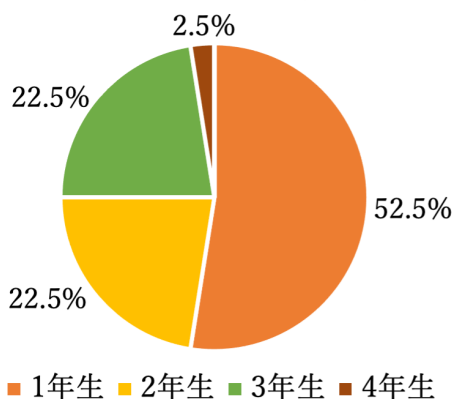
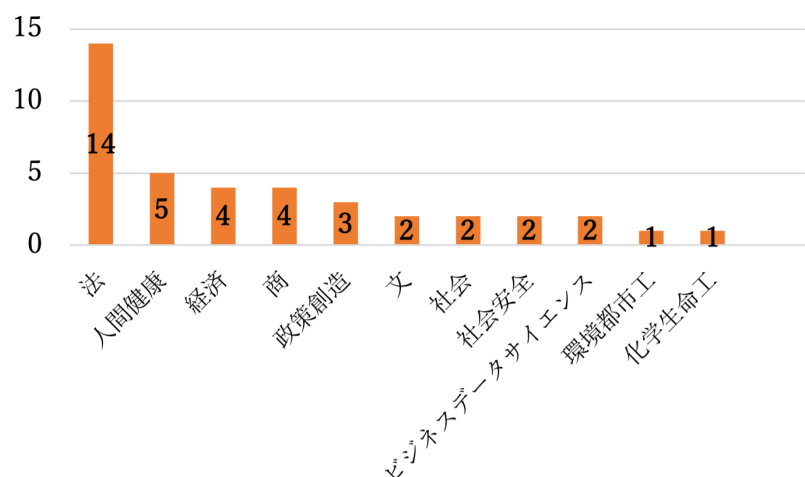


図2 対象者の内訳（所属学部）



結果と考察

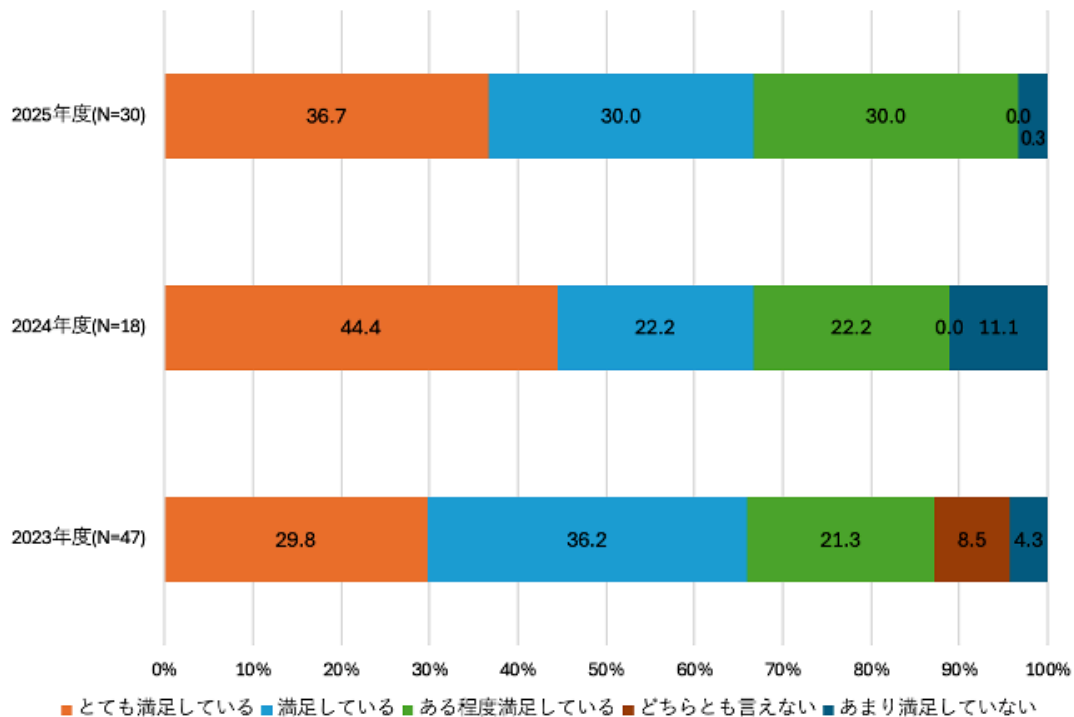
1. 参加学生の満足度：学生たちはどのようにアボカド・プログラムを受け止めたか？

受講後の満足度と推奨度から、プログラムに参加した学生たちが、どのようにアボカド・プログラムを受容したのか検討する。

1) 総合満足度 (T2)

総合的に判断して、アボカド・プログラムは満足のものだったのかについて、「とても満足している」から「全く満足していない」までの7段階スケールで回答を求めた。平均は5.93（昨年度は5.89）であり、回答分布は、図3の通りである。全体では、肯定的な回答は9割後半台96.7%（昨年度は88.8%）に上り、昨年度と比べて「とても満足」の割合は減ったものの、非常に満足度の高いプログラムを提供することができたと考えられる。

図3 プログラムに対する総合満足度（2023・2024年度との比較）



2) NPS：正味推奨者比率 (T2)

NPS (Net Promoter Score; 正味推奨者比率) は、企業や商品・サービスへの愛着度がどの程度あるかを数値化し、顧客ロイヤルティを測る指標として多くの企業、近年は大学においても使用されている。単純な満足度を聞くよりも、正確に満足度を測定できるとされている。本調査では、アボカド・プログラムを他の学生にすすめたいと思うかについて、一般的な回答形式「0～10の11段階」で回答を求めている。スコアの算出方法は、9～10点を「推奨者」、7～8点を「中立者」、0～6点を「批判者」と分類し、回答者全体に占める推奨者の割合(%)から、批判者の割合(%)を引いた数値がNPSの値(-100～+100までの値を取る)となる。

推奨者が30.0%、批判者が16.6%で、プログラムのNPSは「13.4%」（昨年度は「-5.6%」）と昨年度より高い値を示していた。中立者が5割を超えていることから、まだ改善の余地はあるものと思われる。

2. 育成した力：アボカド・プログラムを通じてどのような力が身についたのか？

アボカド・プログラムを受講して、どのような力を身につけることができたのか。汎用的能力として位置づけられる「考動カコンピテンシー」(T2) から考察する。

考動カコンピテンシーは、本学の「Kandai Vision 150」や「学位授与方針 (DP)」でも用いられている本学独自の学習成果の指標である。その中の一部である 16 項目を援用した。16 項目の力について、アボカド・プログラムを受講して身についたかどうか、「かなり身についた」から「まったく身につかなかった」までの 6 段階で回答を求めた。

図4 学習成果（考動カコンピテンシー）の獲得感（2023・2024年度との比較）

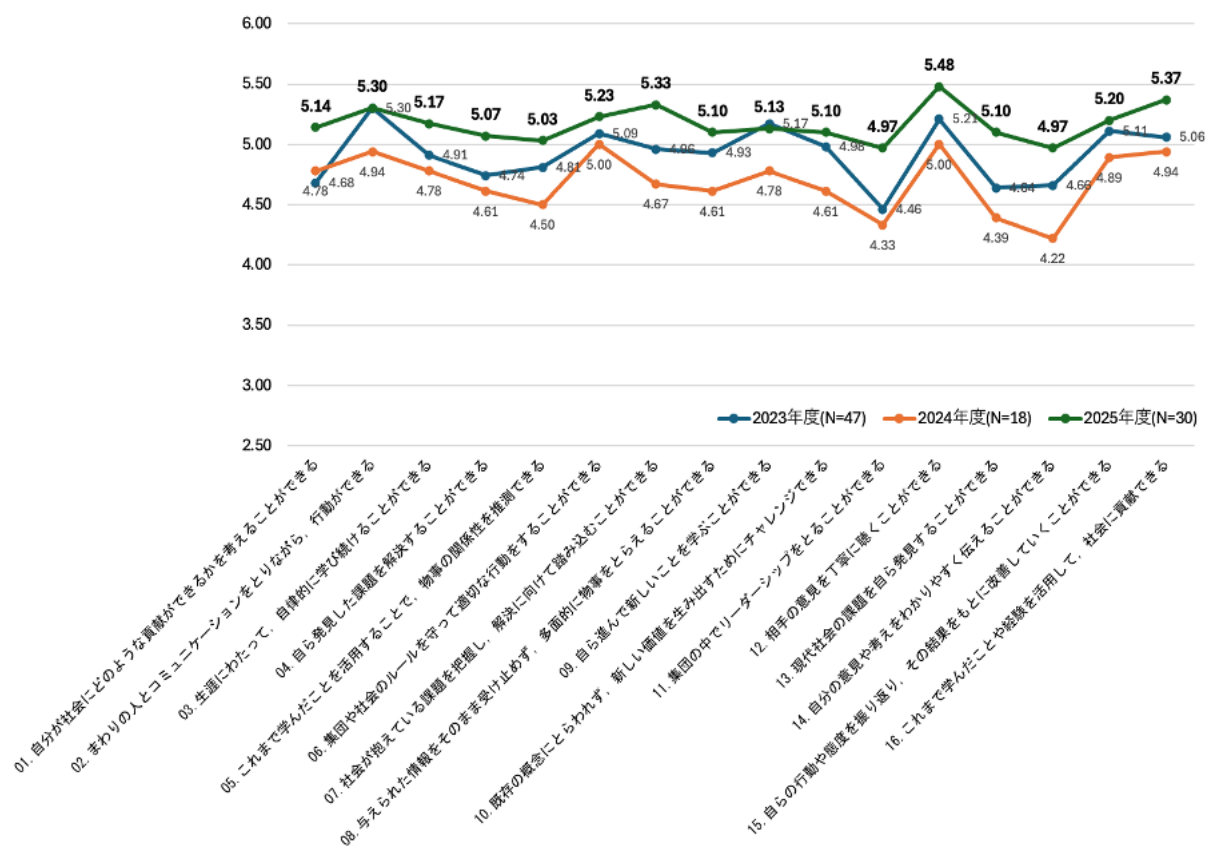


図4の通り、16項目中14項目で5点以上を示しており（残す2項目もほぼ5点）、高い学習成果が得られていることが伺える。また、過去2年と比較しても、ほぼ全ての項目で最も高い値を示していた。全体を通して、「相手の意見を丁寧に聴くことができる」や「まわりの人とコミュニケーションをとりながら、行動ができる」の値は高く、逆に、「集団の中でリーダーシップをとることができる」や「自分の意見や考えをわかりやすく伝えることができる」の値は低く、いずれも対人コミュニケーションに関係した力だが、リーダーシップや伝達力はソーシャル・アントレプレナーシップにおいて重要な力であることから、より強化できるような工夫が求められる。

3. 初期の目的の達成度合い：アントレプレナーシップは身につけられたのか？

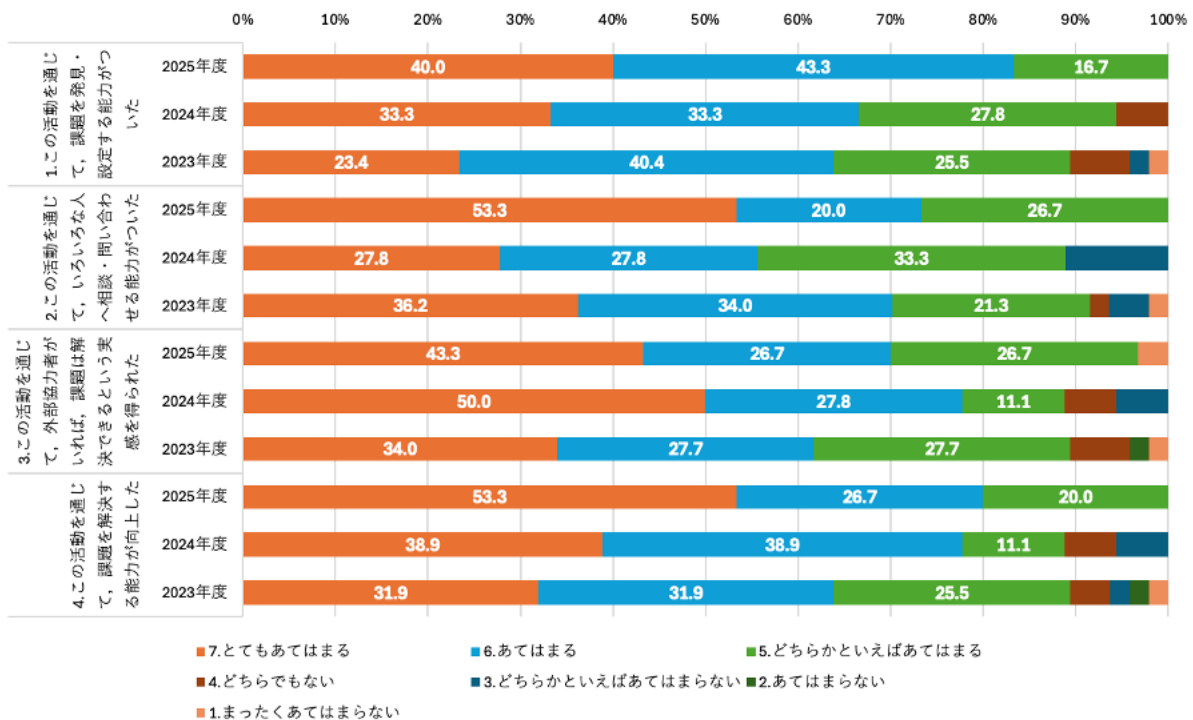
アボカド・プログラムを通じて、アントレプレナーシップ能力（マインドセットやスキル）は身につけられたのか。アントレプレナーシップ能力の獲得感と、ソーシャル・アントレプレナーシップ意図の変化の観点から結果を考察する。特に、ソーシャル・アントレプレナーシップ意図の涵養は、本プログラムの一番大きな目的であるため、所期の目的の達成指標として重要である。

1) アントレプレナーシップ能力の獲得感（T2）

アボカド・プログラムの受講を通して、アントレプレナーシップ能力が育成されたのか。

4つの項目について、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの7段階で回答を求めた（図5）。「どちらかといえばあてはまる」まで入れれば、全ての項目で10割あるいはほぼ10割の学生が獲得できたと回答していた。過年度と比較しても、4項目中3項目で大幅な上昇を示していたことから、本プログラムがアントレプレナーシップ能力の涵養に寄与したことが示された。

図5 アントレプレナーシップ能力の獲得感（2023・2024年度との比較）

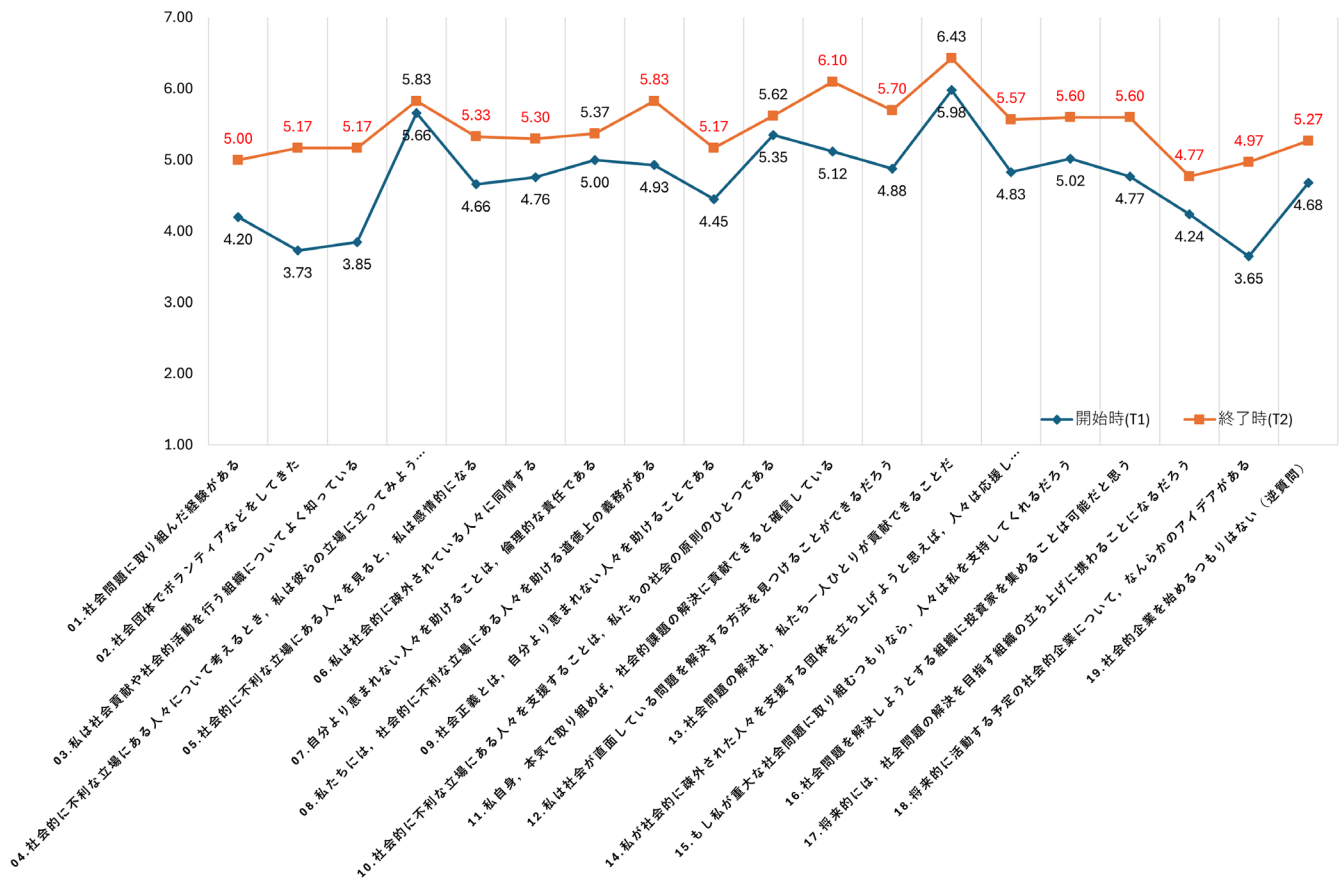


2) ソーシャル・アントレプレナーシップ意図の変化 (T1 → T2)

当該プログラムを受講して「ソーシャル・アントレプレナーシップ意図」にどのような変化がみられたのか。アボカド・プログラムで、最も涵養したい部分でもある。

今回、ソーシャル・アントレプレナーシップ意図に関わる 19 の質問を行った。これらは、先行体験 (質問 1 ~ 3)、共感 (質問 4 ~ 6)、道徳的義務 (質問 7 ~ 10)、自己効力感 (質問 11 ~ 13)、社会的支援の存在 (質問 14 ~ 16)、起業意図 (質問 17 ~ 19、ただし質問 19 は低いほど起業意図が高いことを示す) に関する項目である。これら 19 の項目について、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 7 段階で回答を求めた。図 6 は、開始時 (T1) で聴取した結果と実施後 (T2) で聴取した結果 (平均値) を比較したものである。全 19 項目中、0.5pt 以上差のみられた項目 (図中朱書き) は 15 項目と、大半が向上している結果となった。特に、「02. 社会団体にボランティアなどをしてきた (1.44pt)」、「03. 私は社会貢献や社会的活動を行う組織についてよく知っている (1.32pt)」、「18. 将来的に活動する予定の社会的企業について、なんらかのアイデアがある (1.32pt)」と大きく向上しており、ソーシャル・アントレプレナーシップ育成プログラムならではの項目で肯定的な変化が見られた。過年度と比較しても、最も大きな向上が見られるなど、毎年プログラムの検証に基づく改善効果が現れたものと考えられる。

図6 ソーシャル・アントレプレナーシップ意図の変化(T1→T2)



学生の声から見る良かった点と改善点

最後に、受講生から寄せられた感想（自由記述）の一部を取り上げる。まず、本プログラムの「良かった点」については、以下のような声が上がった。

- 実際に対象地域へ現地訪問を行うことができる点に主に満足しています。カンデの皆様や、地域の方と交流しながらさまざまな学びや成果を得ることができ、これからも継続していきたい関係性を構築することができました。将来的に福井県大野市に対して、今回お世話になった方々と共に地域のために行動したいと考えています。
- 現地訪問をして、実際に地域の方々と交流する機会があったため、当事者視点を持った実行力が身につきました。また、一つの目標に向けてチーム一丸となって取り組むチームワークも身につけることができました。
- 自分が新たなことに挑戦出来たことが良かったです。今までにそういうことに挑戦したことがなかったけれど、グループのみんなと協力して、またその地域の人と交流することで自分の積極性を身につけることができました。
- 難しい課題だったけどチームのメンバーと何度も話し合っ解決策を見つけることができた。アンケートやイベント開催など実際に行動したことで学べるものがたくさんあり成長できた。大学生の今しかできない経験だったと思う！
- 現地を実際に訪問する前の段階で、ミニレクチャーを4回実施し、現地訪問の準備ができた点が良かったです。また、発表会ではただ単に発表をして終わりではなくて、その後しっかりとメンターの方々からフィードバックを受けられ、非常にためになりました。
- 各地域に実際に赴き、地域の課題を発見し、解決に向けてチームで考え試行錯誤し、人を巻き込みながら形にしたという経験は、普段の大学生活では得られない新たな気づきの連続で、とてもワクワクしたと同時に失敗も含めて自身の大きな成長につながる貴重なものであり、これからの挑戦への自信になりました。本当にありがとうございました。来年度以降も形は変わるかもしれませんが、このすばらしいプログラムが続いていくことを願っています。

他にも多数良かった点が挙げられているが、大きくは「①実際に地域へ行き、地域の人と関わりながら課題解決に取り組めたことへの満足（現地協働体験）」、「②普段出会えない大人・地域関係者・他学部学生との交流価値（多様な出会い）」、「③チームで試行錯誤しながら課題発見・解決を行った経験（チーム協働）」、「④挑戦・達成・成長・自信につながったという内面的成果（成長実感）」、「⑤提案が形になる、発表・フィードバックなどの学習設計（学習設計）」、「⑥費用補助・学部学年混成など参加環境への評価（参加環境）」といった内容となっていた。

次に、「気になった点」や「改善点」について取り上げる。

- 基本的に満足していますが、ミニレクチャーに少なくはない時間を費やしたことを考えれば、そこから得られた学びやスキルが少なかったと思います。現地訪問を行う前に、地域ではどのようなソリューションをすることができるのかについての具体例など、実践的なレクチャーが必要だと考えました。また、グループメンバーの構成も少し配慮する必要があると感じました。明らかに負担が偏っていたり、グループメンバーが脱落しているチームが存在しているため、その点は問題点だと考えます。
- 中間発表会が終わってから最終発表会までの約3カ月間、グループ内での活動は継続していましたが、中間発表会までの間はそこそこの関わりがあった全体の班との関わりが無かったので少し残念ではありました。
- 課題に取り組む中でのチーム間の意見交換の機会をもっと持てたら良かったと感じました。私もそうでしたが、取り組む課題を決める際に他の地域や課題ととても迷って決めたという人もいるだろうし、他の課題についても少し踏み込んで一緒に考えるようなチーム間のコミュニケーションがとれたらなと考えます。全体で集まる機会が少ないため全体としては難しくとも、同じ地域のチームでお互いの課題について定期的に共有し、意見を交換して、完全に一つ一つの別のチームとして動くのではなくみんなでそれぞれをよりよいものにしていく協働の仕組みがあればよりよいものになるのではないかと思います。
- 活動当初、地域や課題の概要があまり掴めず現地訪問までにすべき準備が不明瞭だったため、成果報告書だけでなく、中間発表資料や最終発表資料など、前年度までの資料をもう少しいただき、活動のプロセスを把握したかったです。
- 成果発表の後などに各チームでメンバーそれぞれがどのような役割を果たしていたかや尊敬した点、褒めたい所などを言い合う時間があればいいと思う。また、個人で成長した点反省点などを振り返るプリントや、それを共有する時間があれば、より意義のあるものになると思う。

大きくは「①ミニレクチャーの内容が実践に直結していない（事前学習改善）」、「②人数偏り・脱落・役割負担の不均衡（グループ設計）」、「③教員・地域担当・運営との連絡のしづらさ（連絡体制）」、「④他チームとの情報共有・意見交換が少ない（横断交流）」、「⑤振り返り方法・時間配分への不満（振り返り設計）」、「⑥訪問回数・交通費制限（訪問制約）」といった内容となっていた。

実施3年目になり、改善点は減少しつつあるとは言え、運営面や体制など引き続き検討すべき重要な問題は残されている。

効果検証のまとめ

以上を踏まえ、アボカド・プロジェクト全体について検討してわかったことと、来年度の改善点は、以下にまとめられる。

第一に、プロジェクト全体としては、満足度は高く、アントレプレナーシップ能力やソーシャル・アントレプレナーシップ意図の涵養につながるプロジェクトであったことがわかる。また実施した3年間の中でも、それらの反応が一番高く、毎年プログラムを改善させてきたことに有効性があったと考えられる。

この点に関しては、受講生を今後もフォローして、時を経て振り返った時に、このアボカド・プログラムがどのような意味をもっていたのかについて、改めて調査しようと考えている。

第二に、3年間を通して、現地協働体験と多様な出会いに関する満足度と、それに基づく成果が大きく、改めて一般社団法人カンデおよび一般社団法人 Work Design Labのご尽力に感謝したい。

第三に、2024年度に引き続き、2025年度も3名のアボカドOGがメンターとして活躍してくれた。彼女たちは、ミニレクチャーのサポート、中間報告会や全体報告会の司会やその他、十二分に力を発揮してくれた。

第四に、学生のコメントから読み取れる改善点の他にも、アンケートに回答してくれた学生は、このプログラムに好意的であったであろう学生であることを踏まえれば、さまざまな課題が残されていると考えられる。ボランティアな運営による推進や単位とは紐づいていないプログラムといった本プログラムの特徴の美点と課題を改めて考察していく必要があるだろう。

節目の3年間を終えたが、今後、本プログラムは運営体制を変えながら、継続することが決定している。関わるステイクホルダー全員で、ソーシャル・アントレプレナーシップを真摯に追求する豊かなコミュニティとして、「アボカド・コミュニティ」が発展していくことを祈念している。

ソーシャル・アントレプレナーシップとは、人の生き方でもある。

より良い人生を創造していくためにも、そして、よりよい社会を構築していくためにも、求められるマインドセット、アティチュード、スキルである。

よこけい

学生メンターの成長と気づき

今年度は、本プログラムの経験者3名を「学生メンター」として新たに登用した。参加する側から支える側へと視点を移し、受講生への伴走支援を通じて得られた学生メンターらの成長と気づきを記録する。

1. 藤田 真緒（ニックネーム：まお）

■学生メンターに応募した理由

私自身が前年度に参加した際、大学から飛び出して活動する楽しさや学び、これまで関わりのなかった人や地域と繋がりを持つことが大変有意義なものだと感じ、それを共有しサポートしたいと思い応募しました。

■携わって成長したと感じるところ

前年度の参加者時と異なり、より多くの学生や大人の方と関わる中で、自分自身のどのような立ち回りや対応が好ましいかを俯瞰し考える大切さを感じました。まだ未熟なところがありますが、多くの「気づき」を得て成長できたと感じています。

2. 田口 夕夏（ニックネーム：グッチー）

■学生メンターに応募した理由

地域の魅力やグループで活動を成し遂げることができた達成感を、もう一度味わいたいと思ったからです。また、地域の方の協力がなければできなかったことを実感することができたからです。

■携わって成長したと感じるところ

司会をすることが初めての体験でした。学生メンター間で協力をして、発表会がスムーズに進むことを意識して取り組むようにしました。複数のことを行う並列処理能力が高まったように感じます。

3. 田本 維音（ニックネーム：いおん）

■学生メンターに応募した理由

一年生の頃に参加者として参加してみて、地域と関わることや新しい取り組みを始めることについてたくさん学ぶことが出来たので、今度は自分自身がそれを提供してサポートする役割をしてみたいと思ったからです。

■携わって成長したと感じるところ

どちらの立場も経験したことから、同じ地域に行ってもたくさんのアイデアが出てくることを学びました。また、参加してくださったみなさんを支える経験は今まで少なかったもので、大きく成長したと感じています。

■これから参加する学生へのエール

- 今までと違う新しい世界に触れ、

爽りある活動となりますように！（まお）

- 終えたときの達成感は

筆舌しがたいものとなると思います。（グッチー）

- 学部を越えた関わりができます！

周りをたくさん頼って頑張ってください！（いおん）



資料：学生募集用チラシ

プログラムの開始前に配布した学生募集用のチラシ。



空き家活用を考える
プロのマジシャン呼んだ



空気うまい



地域参加型の教育を学ぶ

ことごとちかわいかった



ミニズ地域づくり!?



地域のお祭りを復活させる!

これも地産地消...!



カヌー みんなをつけた!!!



地方の移動の課題
難しいけど大事な話



なすのジャム!? 学祭で完売

緊張の報告会 噛みすぎた...



なんと...
今年で3年目!

関西大学ソーシャル・アントレプレナーシップ プログラム 2025

通称: アボカド
プログラム



地域と協働して社会のリアルな 課題解決にチャレンジする

よりよい社会に向けて、能動的に動き、考動できるソーシャル・アントレプレナーシップ(社会企業家精神&行動様式)を育成するプログラムです。大学を飛び出し、現地に滞在しながら、地域課題解決に向けたグループワークや実践、多様な人とのリフレクション(振り返り)といった活動を通して、骨太な自分を育み、社会との関係を豊かなものにしていきましょう!



こんな人におススメ

将来地域に飛び込んで仕事をしてみたい!
悩みや弱みを話せる仲間が欲しい!
就活に役立つストーリーをつくりたい!

学生募集中/

詳細は裏面を
CHECK! ...▶



関西大学
KANSAI UNIVERSITY

主催: 関西大学社会連携部 地域連携センター (担当 増原 / TEL: 06-6368-1032 (平日9:00~17:00) Mail: chiiki-mm@ml.kandai.jp)
協力団体: 一般社団法人カンデ (地域とのパイプ役) 一般社団法人Work Design Lab (社会実装の伴走)



HP

◆応募要項

各地域のテーマを参考に
行ってみたい地域を選ぼう！



応募フォーム

- 対象** 本学学部学生及び大学院生
- 定員** 40名 ※定員を上回った場合、応募内容等に基づき選考を行います。次に、学年を考慮いたします(1,2年次生の参加を優先します)。
- 応募方法** QRの応募フォームより申し込み
- 応募締切** 2025年5月17日(土)
- 活動期間** 2025年6月～2025年12月末 ※学期中は、学業に支障のない範囲での活動となります

全体でのイベント(原則参加)

- キックオフ・イベント 6月 1日(日)午後 @梅田キャンパス
- 中間発表会 9月 28日(日)午後 @梅田キャンパス
- 成果発表会 12月 21日(日)午後 @梅田キャンパス

ミニレクチャー(原則参加)

- ①地域課題、社会課題を知ろう 6月 4日(水)5・6限 @千里山キャンパス
- ②地域で活躍するための巻き込むチカラ 6月 11日(水)5・6限 @千里山キャンパス
- ③アントレプレナーシップ / ソーシャルアントレプレナーシップをつかもう 6月 18日(水)5・6限 @千里山キャンパス
- ④リフレクションをやってみよう 7月 2日(水)5・6限 @千里山キャンパス

フィールドワーク(原則参加)

夏休みを中心に活動にグループ(各地域課題)単位でフィールドワーク(地域により宿泊あり)を実施します。

リフレクション(原則参加)

定期的にグループ(各地域課題)に分かれてグループ対話によるリフレクションを行います。

参加費 無料 ※現地までの交通費及び宿泊費を本学で負担します(上限あり)。食費などは自己負担。

実施方法 原則対面 ※リフレクションやグループ・ミーティングに関しては、オンライン(Zoom)を併用

実施場所 関西大学 梅田・千里山キャンパスほか
兵庫県丹波市、福井県大野市、大阪府河内長野市、広島県府中市



丹波市

大野市

河内長野市

府中市

丹波市でのテーマ

- ①ローカルでスモールな博物館の展示方法と屋外活用を考える
- ②宿場町ライブラリープロジェクト
- ③地域交流拠点CHATTAベースの運営を考える

大野市でのテーマ

- ①大野の地域メディア制作プロジェクト
- ②福井サーモンの持続可能な養殖
- ③農と食、都市と地方

河内長野市でのテーマ

- ①映画館のない街での映画上映会の実践
- ②多様な視点で共生マップを考える
- ③合意形成オンラインプラットフォームの活用方法

府中市でのテーマ

- ①地域×教育:地域の大人と学校の関係性から「新しい教育のカタチ」を探る

謝辞

「目標を抱けないでいる1、2年生に考働のきっかけを作りたい」その思いに共感いただいた学内外を含めた多くの関係者の皆様とともに、今年度も活動を進めてまいりました。ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。特に、活動資金をご助成いただきました三菱みらい育成財団様には、深くお礼を申し上げます。

また、学生メンターとしてプログラムに参画してくれた「まお」、「グッチー」、「いおん」は、当プログラムに昨年度参加した先輩として、自分たちの経験を後輩たちに伝え、困りごとに寄り添い、励ましてくれました。そのおかげで、プログラムはスムーズに、かつ効果的に進行できたと考えています。

参加した学生は学部や学年を越えて集う”ごちゃまぜ”の環境のなかで、自分の強みや生きがいを見つめる「自己探求」を繰り返しながら、実践の場である地域でのフィールドワークを通じて、社会に役立つ力と、自分らしい未来を切り開く力を育むことができたことと思います。

引き続き、関西大学独自のアプローチを活かし、更なる教育効果の追求を目指したいと思います。

関西大学 アボカド・プログラム事務局
(地域連携・高大連携グループ)

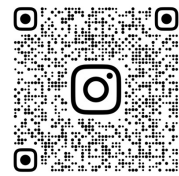
2025 年度

「ごちゃまぜ協働」によるソーシャル・アントレプレナーシップ育成プログラム 成果報告書

発行日 2026 年 3 月

制作・発行 関西大学
社会連携部地域連携センター
〒 564-8680
大阪府吹田市山手町 3 - 3 - 3 5
TEL : 06-6368-1032 (平日 9:00~17:00)
FAX : 06-6368-0858
E-mail : chiiki-mm@ml.kandai.jp
HP : <https://www.kansai-u.ac.jp/renkei/chiiki/index.html>

編集 一般社団法人 カンデ



@KANDAI_AVOCADO

instagram のリンクはこちらから
活動の様子などをご覧いただけます！



2025 年度プロジェクト HP の
リンクはこちらから

※本プログラムは、一般財団法人三菱みらい育成財団の
助成事業「カテゴリー 4 : 21 世紀型教養教育プログラム」に採択され実施しています。

本書の収録内容の無断転載・複写・複製等を禁じます。

